

---

× 仮面ライダー コラボ大戦EX 『再開のD / 二色と三色と騎士と...?』 OOO & Dies Irae サイド

作者月詠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー コラボ大戦EX『再開のD／二色と三色と騎士と…?』OOO&DiendiesIraeサイド

### 【Nコード】

N4455W

### 【作者名】

作者月詠

### 【あらすじ】

【うえああにんぎゅう！（わーにんぐー！）】この小説は緑紫混離さんの『仮面ライダードーツ』とのコラボ小説です。それぞれの物語の背景は『とある能力の異常言語』本編と『仮面ライダードーツ』本編を参照してください。【注意事項だZE】音無咲也が何かを企む（？）中…音霧霊夢とアंकはいつもの日常を過ごしていた。しかし、音霧霊夢はある新聞の記事に憤慨する。それが、今回の事件の始まりであった……

仮面ライダー×仮面ライダー

コラボ大戦EX<sup>TM</sup>

再開のD／二色と三色と騎士と

Part.1です。

？音霧探偵事務所

音霧探偵事務所…ここには本来、霊夢が居るはずなのだが、代理として、一人の少女がいる。

「ああ。そうだ。ん？ああ、私は少しな……その方が良さそうだな。丁重に迎えを頼むよ？…ふむ、宴会か…なら、終わったら酒か何か宴会で余った物持ってきてくれ。飲み物は私は用意する。…ああ、そうそう。北西<sup>ほくさい</sup>に伝えておいてくれ。『この罫<sup>トクベ</sup>がどう言う意味をもたらずか。君は理解しているだろう？』とな。ではな…ふう」

何処かに電話していたのだろう。

咲也は通話が終了したスタッグフォンを閉じ、コーヒーを一口飲んで一息つく。

「まるで計ったみたいなタイミングだと思うよ、自分でも」

自嘲気味に、そして自分に語るかの様に呟く咲也。

先日、漸く過去の学園都市から帰ってきた霊夢。

次元の穴を抜けた瞬間に気絶し、丸一日を寝て費やしたのだ。

当然、過去と現在において二回次元の穴を開いた咲也にも負担が無いわけじゃ無い。

だが精々、精神年齢が高くなったり低くなったり右往左往しただけ  
?? 最も、不安定な為に麻理沙が一番被害を受けたのは言うまでも  
なく??である。

咲也は思っ。

(何でこのコーヒー塩の味がするんだ? 砂糖を入れたはずだが…?)

塩が入ったカップと砂糖が入ったカップを見て思っ咲也…

…謎??言うまでもなく報復だろう??だけが残った。

? 男子寮

ここでは色々な物語が紡がれた。  
不幸少年と謎シスターの出会い。  
転生者と不幸少年の出会い。  
炎の魔術師との戦闘…

様々なことが起こった。

「……………」

そして、男子寮のとある一室……そこで、一人の青年がアイスに嚙り付きながらツールフォンを使っていた。

「……………チツ。コアメダルが少ないな……のくせにナチュラルメダルは9枚……どうにかできねえか……？」

青年……いや、800年前に封印された存在、グリードの一人、アンクはそう言いながらツールフォンを操作し、アイスをガジガジと食べ続けていた……すると。

「……………アアアアンクウウ……？」

「ッ！？！？」

突然、後ろから地獄の底から届いた様な声が聞こえ……アンクは即座に振り返る。

そこには……なぜか、セルメダルを三枚しっかりと入れた状態のメダジャリバーと抜き身の太刀……【妖刀・心渡】をもった少女……失敬……少年、音霧霊夢が立っていた。

「ど…どうした、霊夢？」

「…どうしたじゃないでしょう…ッ！　これを見て下さい」

霊夢は、恐ろしい気迫を携えたまま一枚の新聞をアंकに渡す。

「あ？…『怪物が飲食店を襲う』？」

アंकが怖々とその新聞を読むと…そこには、『怪奇！？赤い鳥の怪人が飲食店やアイス店を襲う！？』という内容のニュースが記載されていた。

「…『赤い』『鳥』『怪人』『アイス』…この四つだと、貴方が当てはまるものがないでしょうが…！」

霊夢がそう言い放つと…アंकも切れたのか、大きな声で言い返す。

「ハア！？ふざけんな！なんで俺がそんなことやらなくちゃいけないんだ…！」

「アイス食べたさでしょう?!」

霊夢も一歩も引かずにそっぴい返すが…アंकはそれを鼻で笑って言い返す。

「ハッ！…おい、霊夢。俺も言いたくないが…俺じゃないって理由を教えてやるよ…」

「む……何ですか？醜く言い逃れですか？」

霊夢は、冷たい視線のままアंकを見つめてそう言う。

「…俺の今の姿を見て、誰が鳥の怪人だと思う？」

「……………あ」

アंकが一言言うと、霊夢は一瞬ポカンとした顔になり…納得する。今のアंकの姿は不完全な物。今の姿は右腕だけが怪人態となれるほぼ人間の姿だ。

その状態を見て、【鳥の怪人】という人間は…ほばいない…精々コスプレ扱いだろう。

「……………で、何か言うことは？」

「あう…ゴメンナサイ。」



アंकが少しビビっていた態度を一転させ、偉そうにそう言つと…  
霊夢は素直に謝る。

「…だったら、この怪人はなんですか？」

「知るかよ！！…カザリがウミネコヤミーでも作つたんじゃないのか？」

「い、いや、確かにネコとはついてますけど…。」

霊夢は悩みながら、アंकに大人しく怒られているのだった。

\* \* \*

学園都市入り口付近。  
そこに三人の人影があった。

「まったく…なアンでラインハルト卿は俺達をこんな所に送り込むかねエ…」

人影の一つ、輝くような白い髪に黒いグラサンでパンク風の男が咳く。

「何、もう忘れたの？首領サマが肩入れしてる子と顔合わせ…」

「ンなこたアわかってんだよッ！！それで何で俺達を選らばれんだッて話だ！自分で行きや良いだろ！！」

二つ目の人影、朱色の髪のリルの付いた服装の少女が呆れたように言うが、一人目がそれを遮り、怒鳴る。

「落ち着きなさい、『ベイ』。『マレウス』も煽らない」

「別に煽ってないわよー（棒読み）」

「棒読みじゃないですか…」

騒がしい二人を三人目の黒長髪でトレンチコートの高校生ぐらいの少女が宥める。

『マレウス』と呼ばれた少女は棒読みでそれを流す。

『ベイ』と呼ばれた男は口笛吹いて誤魔化している。

「ひゅ〜…しゅ〜…」

…吹けていないが…（汗）

「私達が与えられた任務は一つ。  
『音霧霊夢にコアメダルを渡す事』よ。ちょうど任務が無かった私達が適任だと思われたのよ」

高校生ぐらいの少女が手に持つのは、太陽の輝きで光沢が映える力ブトムシの意匠が描かれた白いコアメダル…

「わあってるよ…ったく」

ベイと呼ばれた男の手には高校生ぐらいの少女とは逆に、太陽の輝きを弾く様な暗い銀で、サソリの意匠が描かれたコアメダル。

「聞いた話じゃ霊夢って子は男の子でカワイイらしいじゃない。  
若い…青い果実…じゅるり（ボソッ）」

かーなーり危険な（？）思考のマレウスと呼ばれた少女の手の中には、一切の光沢感を感じさせない灰色でネコの意匠が描かれた銀のコアメダル。

この三人は何者なのか…  
その手に持つコアメダルは何なのか…  
その真意を知る者は、ここにはいない。

e  
n  
d  
.  
.  
.

仮面ライダー×仮面ライダー

コラボ大戦EX<sup>TM</sup>

再開のD／二色と三色と騎士と

Part・2なのぜ。

学園都市某所・道中

「むう…失念していました。よもや冷蔵庫な中がアイス以外『空』とは…あの鶏肉チクショウ、自分の好物はちゃっかり調達してるんですから…」

少J…少年『音霧霊夢』は、口をへの字にしながら食料調達にスーパーへ歩いていた。

原因というのは、彼の言う通り『冷蔵庫が空っぽ』ということにある。

鶏肉チクショウ…アंकはちゃっかり相季さんからアイスを大量に貰っており、冷凍庫部分はアイス一色で占領されているとのこと。

「それにしても、今日の昼ごはんはどうしましょうか………簡単に焼きそばか油そばにしましょうか。久々にこってりしたものが食べたいですし」

左手で右肘を押さえ、右手を顎に添えてうんうんと頷く霊夢。何処はかとなく、その姿は『何故か』和む。

「…む、何やら失礼なことを考えられた気が……」

地の文にまで気付くのかコイツ…（汗  
すると、その時であった。

道中の、とある路地の前を通ると急に熱量の上昇を感じたのだ。

「この感じ…強能力者（Level 3）ぐらいの発火能力バイロキネシスの使用後  
現象？またケンカでしようかねえ…。

なんか倒れてますし。一応救急車ぐらいは呼んでおきますか」

丁度持っていた紙に『救助者ここにあり』と書いて壁に張り付け、  
スタックフォンで電話して場所を伝えた。  
善い事をしたと、ほこほことした気分で霊夢が歩いていると…

「……おや？あれは確か                      ウヴァさん（人間態）？な、な  
んか…ものつそい乙女してませんか？雰囲気的に                      お相手は…  
はて？何処かで見たような…むむう…思い出せません」

そのウヴァの『お相手』というのは、雰囲気、動作、手引きに足配  
り…言うなれば『紳士』である。  
茶髪の髪を後ろで一本縛り…その姿が、霊夢の記憶の何処かに引っ  
かかったのだろう。

「さて、人の恋路を邪魔するものは何とやら…と言いますが  
聞く耳を持っていませんよね。あなたがた貴方方は…」

オオオオオオオオオオオオ……

先ほどとは別の路地裏から、ヤミーの『成り損ない』である【屑ヤミー】が現れる。

それも、七体：結構な数である。

霊夢はそれを見据えながら、片刃の大剣『メダジャリバー』を『四次元ポシエツト』から取りだし、肩に担ぐ。

「半端な欲望      いただき 喰らいます」

その言葉を皮切りに、霊夢は駆け出したのだった。



## 公園

霊夢や当麻の男子寮と同じく、この公園でも様々なドラマがあった。

霊夢のオーズへの変身

介旅初矢の逮捕

そんな場所に、アंकは訪れていた。

「新作の『アイスエイジバー』か…味はシンプルに塩か」

……無論、アイス片手に、である。

尚、原作よりもアंकの一日のアイスの消費量は少ない。

アंकにとってもアイスは好物であるが、それと同時に霊夢の料理はお気に入りなのである。

アイスを大量に食べば霊夢の料理は食えず、逆に霊夢の料理を大量に食べばアイスが食えなくなる。

『だったらどちらかの量を減らせば良いじゃないか』

神様のお告げ（？）を受けたアंकは再び思考する。

どちらを減らせばいいか？

アイスは大量に食べたい。

しかし、霊夢の料理を減らせば

『え…？           そうですか…そっか…ぐす』

泣き必至である。

何としてもこれは避けたい…

そう思った結果が『アイス消費量削減』であった。

そんなことはどうでもいい  
閑話休題

「セルも大分堪ってきたな…これなら」

アंकはベンチから立ち上がり、深呼吸して…

「こと…」

アंक本体の腕が憑依していた男から離れた。

気絶したままの男はベンチに倒れており、アंक（腕）はその場から少し離れる。

すると、アंकの腕の付け根から大量のセルメダルが溢れ出し、人

の形となる。

セルメダルが赤く輝く…  
輝きが収まると…

朱色でボサボサの腰まである長髪  
猛禽類を思わせる鋭く赤い瞳  
鷹の意匠のヘアピン  
胸に黒いサラシ

孔雀を思わせる赤いレザーロングコート  
コンドルの意匠の付いた銀時計に黒い皮製のズボン

その姿は…明らかに女性。  
だが………

「今風に合わせてみたが…我ながら上出来だな」

ハスキーボイスではあるが、完全にあの『アंक』であった。  
外見上は明らかな『レ』で始まって『ス』で終わるバイクでブイブイ  
言わせる方々のようだ。  
無論、右腕は怪人状態の腕である。

「…服だから未だ良いが。元の姿は悲惨だろうな…右腕以外全身黒い  
包帯とか痴女かよ」

自分の想像にぶるりと震えながらその場を去って行くのだった……

「これでえっ…ラストォ！」

《S i n g l e !   S C A N I N G   C H A R G E ! 》

青白い光を帯びたメダジャリバーが最後の屑ヤミーを斬り裂く。  
霊夢の周囲には半分に割れたセルメダルを大量に散らばっており、  
一枚換算で『二十枚』。

つまり合計『四十体』の屑ヤミーがやってきたのだ。

いくら『屑』と名が付いていても曲がりなりにもヤミー…一体一体はそれなりの力を持っているのだ。

それを四十体。変身せずに相手した霊夢は疲労困憊…

いや、『変身せず』というのは『変身しなかった』のではなく『変身できなかった』のだ。

屑ヤミーの気配は極小…それにこの数である。

変身する隙は無く、元々実戦経験は皆無で、オーズのドライバーに染み付いた戦いの記憶頼りにしていた霊夢に追い討ちをかけるように『周囲警戒』、『メダジャリバーを持つ筋力』、『反応強化』を能力で強化。

コンデイションは正に『最悪』である。

（ぐっ…能力の反動ですか……それに、近くに偽ウヴァが居る可能性も未だある。早くここから…！）

肩を引きずりながら路地を離れようとするが、能力の反動による強烈な頭痛が霊夢を襲う。

霊夢は常時『並列思考』を能力で使用し、『演算』、『通常』、『戦闘』と振り分けている。

それに加えての身体強化である。

身体強化とは、単にその箇所を強化するわけではない。

その箇所に繋がる信号経路を強化し、脳に掛かるリミッターを外し、その箇所をリミッター解除状態に耐えうるよう硬質化させるのだ。

つまり、一箇所の強化で複数の場所を補助と強化を同時に行わなければならぬのだ。

しかし、それを長時間、複数箇所を強化すれば、結果は…

（タイムリミットを越しましたが…かなりまずいですね）

強化箇所の一時的硬直。

簡単に言えば『筋肉痛』と酷似した状態となるのだ。

しかし、筋肉痛とは比べ物にならない状態で、指一本すら動かせないのだ。

痛みを通り越した先は『無』。

感覚の一時的完全ストップである。

手足があるのに無いような感覚に陥るこの状態。  
霊夢には覚えがある…忌まわしい感覚であった。

『一瞬の死』

前世の死んだ瞬間。

何も感じず、『一瞬が永遠』と感じた。

これがある故に、霊夢は能力の多様を避けていたつもりであった。

（い、意識まで…もう、駄目……）

霊夢の最後に見た光景。

それは、見覚えのある白いワンピースに灰色のショートジャケットと、青基調の服だった。

鴻上グループ本社

学園都市の強大なバックスポンサーである鴻上グループの本社。  
その最上階にある会長室にて、会長と秘書はいた。

「里中君。音霧霊夢君は何故オーズになれるか、知っているかね？」

カチャカチャとクリームを作る鴻上会長。  
会長の問いに、秘書である里中は少し考えて答える。

「その素質があつた…ですか？」

「確かにそれも一因。しかし、それだけではないのだよ。

オーズは現在私の知っている種を合わせて六種類の種族にそれぞれ三種類のコアメダル…計十八枚を操る。

バラバラな亜種形態ならば負担は少ないが、コンボともなると、内包された欲望のエネルギーを解放し、その力を発揮する」

「まるで…水門ですね」

「水門か…なかなか良い表現だ。

そう。コンボの力…言わば鉄砲水だよ。

それ相応に、見合つた器が必要となる」

「それもまた一因ですか？」

「勿論だよ里中君。水にはコップ、といった感じにね。

オーズ全てのコンボを受け入れるような器は…そうだね。最低でもヴァチカンの面積分は必要だ」

「なっ…！国一つですか！？」

「それだけ、オーズの力が驚異的だということだよ。

それに、あくまでも『最低でも』だ。

しかし、音霧霊夢君は人並みの欲望を持ち合わせている。どうやって、コンボの力を乗り越えたのか…」

「もしかして、霊夢君の能力ですか？」



「大正解だよッ！里中君！

彼は無意識で能力による『欲望のエネルギーの循環』をしているんだよ。

出て行く膨大なエネルギーを、それに耐えうるよう流れ出したエネルギーで肉体をカバーする。

そう、彼は欲望のエネルギーを『サイクル』させているのだよッ  
！！」

オーズの素質を持ったいる事。

最低限の器を持っている事。

そして、欲望の膨大なエネルギーをサイクルさせて、足りない器を補助できる事。

それが霊夢が『オーズ』である所以である。

しかし、何が如何であれ、何かしらの穴がある。

「しかし、弱点もまた、存在する」

「人間たる限界…ですか」

「そうだよ、大 正 解 だ！！里中君！！

可能性で越えられなくもないが…必ず限界は存在する。

文献には、800年前のオーズは『人間とグリードの中間的存在であつた』とある。

普通ならば、それぐらいしなければ耐えられないのだよ……オーズの力というのは」

会長室に沈黙が漂う。

例えオーズとはいえ、異様な戦いに巻き込んだ少年に強いことではない。

寧ろ、安全圏でゆつくりとさせたいぐらいだろう。

しかし、それは出来ない。

彼は嫌がらず、あまんじてその戦いに挑んでいる。

『助けたい』という欲望を胸に……

ならば、自分達に出来ることをすれば良い。

だからこそ…

「バースがいる…！」

『誕生』の名を冠するメダルの戦士。

未だ完成はしていないが、完成まで八割を切っているらしい。

少しでも、あの少年の負担を軽くする為…

自分達にもある『助けたい』という欲望を、現す為に…！

男子寮・霊夢の部屋前

「ンだよ！居ねえじゃねえか！」

「うるっさいわね…少し音量下げなさいよ。近所迷惑じゃない」

「るっせーぞマレウス…！つか、オレら何回警備のヤローに引つかかってんだよ。」

「オレらそんなに怪しいかア！？」

「アンタが殺気をギンツギンにしてるから不審者に見えるんでしょ  
うが…！」

「学生のいる街で挙動不審で、殺気ビンビンで、犬みたいにグーグー  
唸ってたら誰だって怪しむっての！」

「挙動不審じゃねえし犬でもねえ…！だいたいデメエこそ、猛禽類  
みてえにガキ狙ってんじゃねえよ。オレより怪しいじゃねえか。あ  
あ？」

「猛禽類とは失礼な！ア フルのチワワさえ毛皮を剥いで逃げ出す  
この私のキラキラで純真無垢な瞳の何処が猛禽類なのよ！」

「お前がア？純真ン？無垢ウ？」

**ダアーーーーッ  
ハハハハハハハハ！！！**

冗談はガキみたいな容姿とサバ読んだ年齢にしるよロリババア！」

「カツツーン…形成！」

「なっ……ここで形成すんな……ってギャアアアアアアアア！」

「何してるんですか貴方達は……」  
「汗」

誰もいない寮の前に、騒がしい声が響いたそうなの。

鞍馬探偵事務所一行が学園都市に来てから翌日／早朝6時 音霧  
探偵事務所・咲也Side

何時も眠っているベッド 元ははじめ一のなのだがな（笑 から起きる。

昨日はなかなか有意義だったな。

まさか、アカネがあんなことを仕出かすとはな…クッ（思い出し笑い

まあ、一君の拳骨は未だ痛いかな…（痛

水を眠気覚まし代わりに起き抜け一杯。

一気に飲み干し、テーブルに置くと。

その後、コーヒー 無論、ブラックさを淹れると一君の声が聞こえた。

どうやら目が覚めたようだ。

一君とマーブルと一緒にいる（確信犯）ソファアへ向かう。

そこで私が見た光景は…

一君がマーブルの胸を鷺掴み（ここ重要）していた。  
マーブルも起きたようだが、強炭酸の影響で二度寝を実行。

一君は自分に、もたれかかる形だったマーブルを起こさない様に立ち上がり、体を伸ばす。

「……………もつたいない、そこで襲うくらいの度量はないのかい？」

「…なに勝手なことやってんです、貴女は…」

私の言葉に一君はゆっくりと振り返って溜息混じりに言う。  
クツ…霊夢より慣れているな。霊夢は真っ赤になって大慌てだからな…ま、そこが可愛いのだが（笑）  
しかし、コイツはそんな度量が無いのを知っているし…

「…まあ、それが出来ないから君…なんだろうけどね。」

「貴女が何を言いたいのかは聞かないでおきますよ…」

私はニヤニヤとしながらもコーヒーを啜<sup>す</sup>る。  
やはり他人をイジるのは楽しいなあ

「とりあえず…紅茶ありませんか？ダーズリンとか」

「ああ、もちろん。君は珈琲より紅茶派だね。流石紳士」

私はそう言つと、棚から紅茶の缶を取り出し、一君に投げて渡す。

「どうも」

一君は軽く会釈し…自分の分の紅茶を淹れると一口飲み…一息つく。

「…で。今回私を呼んだのは…なぜです？」

「…………脈絡がないね。もうちょっと雑談を楽しまないかい？」

「嫌ですよ。…昨日、ドーパントではない怪人と戦ったんですよ」

…………な、何という主人公体質（汗

早速出くわしたのか…は…

私は、恐らくヤミーであろう怪人の情報を聞く。

「…………ふむ。それって、なにか動物の特徴を持っていたかい？サメとかサイとか」

「いえ、虫でしたよ。頭は逆さにしたクワガタで、下半身に黒い包

帯を巻いたのもう一体ドレッドみたいな頭で、パンクロッカーみたいな猫の奴が」

「……………いきなりそいつと会うのか…君は」

「…なにか、ヤバイ奴ですか？」

ヤバイも何も親玉…それも偽の方が。

一君、やはり君は主人公体質決定だよ…クツ（笑

「ああ。今学園都市には、二種類の怪人がいる。メダルで出来た、人の欲望から怪人を生み出す、『グリード』。欲望から生まれる怪人、『ヤミー』だ」

「……………で、そのグリードが…私が会ったのですか？」

「ああ。虫系幹部のウヴァと猫系幹部のカザリだな」

私はそこまで言うと、一口珈琲を飲む。

「……………でだ。一君には、今回ヤミーも関係してるはしてるけど…ドーパントを倒して欲しい」

「…学園都市に出たんですか？」

「ああ。ほら」



咲也は机の上にあった新聞紙を一に投げて渡す。

そこには、『怪奇！？赤い鳥の怪人が飲食店やアイス店を襲う！？』  
という内容のニュースが記載されていた。

「……なるほど。ですが、そのヤミーという怪人の可能性は？」

「いやない。今のところ鳥のヤミーを作れるグリードは活動不可能  
なんだ。だから、その場合はドーパントだ」

私がそう断言すると、一君は帽子を押さえ、ため息をつく。

「……一応、風都以外のところにいるドーパントは『あの人』が退治  
してるはずなんです……」

「あの人って？」

私が聞くと、とたんに一君は顔を曇らせる。

「……………人類最強の赤色です。」

「？……よく分からないけど、まあいい。で、今回の依頼は一つ」

一体何なのだろうか…？

まあ、今はいいか。

私は一指し指を一本立てる。

「学園都市で暴れているドーパントを捕まえ、メモリを破壊してくれ」

「了解しました。」

一君がそう即答すると…私は思わず溜息をつく。  
探偵ならば普通はアレを聞くだろうに…

「…どうしました？」

「……………一応、君もそれで喰っているのなら報酬くらいは聞きたまえよ」

「貴女にそう言う事を言われるとは思いませんでしたね……」

私の溜息交じりのその言葉に、一君は苦笑する。

…失敬な。

「貴女と一緒に暮らしてた間、基本的に私が経理とかしてたでしょう……」

「…別に、私はそれ以外をしてたからいいだろう」

一君が言い返すと、私は視線を逸<sup>そ</sup>らして言う。

「……………料理、洗濯、掃除、裁縫…全部私がやってたんですよ？あの麻理沙さんとかいう人がいなければ貴女、生活できないでしょう…」

「失敬な。私だって一応できるさ。  
ただ、やらないんだ」

「…やらないは出来ないとそこまで変わりませんよ。結局何もしてないのは同じですから」

一君が笑いながら言うと、私は話を変える様に声のボリュームを少しあげて言う。

君は私が二…ゲフンゲフン！自宅警備員ならぬ事務所警備員だと言いたいのか…！？

「とにかく！今回の報酬は昨日マールちゃんから色々欲しい物がある…と聞いているからそれをマールちゃんに渡す！いいね？」

「…了解です」

私が誤魔化すようにそう言つのと、マープルが（…………）と言  
うところで一君は引き下がる。

ええい、リア充め！

そして、一君は立ち上がって帽子の位置を直し、伸びをする。

「では……とりあえず、朝も早いですが行つてきます。

咲也、貴女は私が調べている間、気休め程度でいいので、【仮面流<sup>マスク</sup>】  
の情報網使つて怪人の目撃情報とかを調べて下さい。  
で、情報が集まったらマープルに検索を」

「了解した」

私がそう言つのを聞くと、一君は事務所のドアを開けて外に出たの  
だった……

皆さんおはようの時間だぜ。  
音霧麻理沙だ。

私は日課であるランニングを実行中なんだ。

『何事も怠ること無かれ』：兄貴の教えで力にはそれに似合った鍛錬と研究が必要だからな。

その分、私の能力である発火系能力と発電能力の複合式能力の『バイロキネシスターマシク撃魔術』は感情や心の持ち様で威力とかが左右される。

『努力は自おのずと力になる』

これも兄貴の教えだ。

さて、そろそろ休憩するかな？

極普通の自販機で『炭酸はパワーだZE マスタージュース・オレ  
ンジ味』を購入。

絵柄は白黒の魔女っこ（？）で、何だか親近感沸くんだよな。…何  
でだ？

「あら、麻理沙じゃない」

「あ、麻理沙だ」

二人分の声が遠くから聞こえる。

…ちよつと待て。何でアイツら居るんだ!?

「有栖<sup>ありす</sup>!？それにパチエ!？お前らなんでここに!？」

「知らないわよ。パチエと一緒に図書館の帰りついでに咲也先輩の家に寝泊りしてるだろうアンタを訪ねようとしたら霧に包まれてここに居たのよ」

【有栖<sup>ありす</sup>・守樹<sup>かみき</sup>・マーガルト】

兄貴の一年後輩で、文芸部の部員 兼 弓道部のエース。  
いつも濃紺のブレザーに白に赤いラインの入ったストールを纏い、  
カバンに人形と本を入れて持ち歩く黒髪のセミロングに金色の瞳の  
人形みたいな容姿のやつで、年齢は違えど大親友の一人。

「元氣無さそうだったから、クッキーも持ってきたの」

「そ、そつか。ありがとな、パチエ」

「うん…」

【パチエルト・ライブラリアン】

私の同級生で、図書委員で、別名『本の似合う夕闇の少女』の名を

持つ。

曜日に合わせてヘアピンを七種類に変えていた変わったやつで、黒紫のふくらむような長い髪が特徴的。

相当な物知りで、完全記憶能力者でもある。

ちなみに料理の腕も相当なもので、私も結構世話になった（笑  
こいつも私の大親友の一人だ。

この二人も、私や兄貴、咲姉みたいに人知を超えた能力を持ってる。  
有栖は『心を込めて縫った物を自在に操る』  
パチエは『本にある虚実を使える』

「お前ら、ここが何処だか解るか？」

「知るわけ無いじゃない。気付いたらここにいたんだもの」

私の質問に有栖が溜息交じりに答える。

「ここ…見覚えがある」

「本当なのパチエ！？」

さすがパチエだな。  
もう解ったか。

「学園都市…」とある魔術の禁書目録<sup>インデックス</sup>の世界」

「何で解るのよ?」

「アニメで見覚えのある自販機とベンチの位置。木々と草むらの位置。朝霧の向こうにあるビル群の位置。全て一致した」

…そこまで求めてないぜ(汗

「なぜここまで同じか…パチエ、解るか?」

「推測だと…平行世界」

「確かに有り得なくも無いけど…もしかして『アイツ』の仕業?」

アイツ…有栖は多分あのロリババアのことってんだろうが…違うんだぜ。

「(ふるふる)…違う。あの時期はやる気が起きなくてニートしてる」

「ああ、そうだった」

互いにふざけ合う私たち。

しかし、あのコスプレ死神の仕業じゃないだろうし…

何が起きてるんだろうな…



ナチュラルコアメダルの出現。  
偽グリードの活発化。  
私たちの世界からの来訪者。

それは何かが起こる予兆なのかは、誰も知らない……か。

P a r t . 3 へ続く。

仮面ライダー×仮面ライダー

コラボ大戦EX『再開のD／二色と三色と騎士と

異常言語本編に載せた際には一部文章を変更しています！  
では、Part.3です！

咲也Side

オレも情報収集に思ったが・・・どうやら、そうは行かないみたいだな。

『……………モット、モット財ヲ…!!』

全身が小汚い黄色と黒のマダラ模様の毛皮に覆われ、腰にはボロボロの黒の腰布に隠れて盗賊の様なナイフやロープがあり、そして、頭部は犬にも見た猫科の獣……ハイエナの毛皮をそのまま使った被り物の様になっており、顔は目をつぶった人間の様な物。考えられることから……

「寄生型・・・偽のカザリのヤミーか」

オレが苦虫を潰したような苦悶の声で呟く。  
ウヴァの『分離型』、アंकの『巣作り型』ならばなんとかあったが、それ以外はオレのみでは役に立たない。

『寄生型』は大量のセルメダルからヤミーの親を掘り出さなくてはならない。

メズールの『繁殖型』では物量に押され、ガメルの『欲求型』はパワーで押される。

出来れば变身したいが、私や霊夢のような装着变身型は盗まれると弱い。

クウガ系、アギト系、響鬼系、カブト系、キバ系ならば心配はなかっただろうが……

・・・いや、どうにかなるかもしれない。

「いよいよ、変身といこうか！」

麻理沙によつて改造された『ロストドライバー』・・・『シングルドライバー』を腰に装着し、『T』と描かれたサファイアブルーのUSBメモリ・・・『ガイアメモリ』のスタートアップボタンを押す。

《Time!!》

「変身！」

ギョイイン  
ジャコン！展開！！

《Time!!》

シングルドライバーに差し込まれた『タイムメモリ』は、ガイアウイスパーを放ちながら光と『何かの破片』を放ち、『何かの破片』がオレを覆つ。

光が収まった。

そこに立つオレは青基調のメイド服を身にまとっていた。

『お前の時間は私のもの。お前に自由はない！』

『ホ……ザ、ケエ！！』

音速とも取れるスピードで迫るハイエナヤミー。  
しかし、ソレも無駄に終わる。

私が持つナイフ型のメモリスロット付き武器『タイムリッパー』に  
タイムメモリを挿し込む。

《Time!! MAXIMUM DRIVE!!》  
『タイムジャック・ザ・ワールド!!』

私以外の時間が灰色に止まる。

時間を止めている内に、蹴りや斬撃でセルメダルを退かしていく。

そこには、黒のオールバックに赤色のメッシュをいくつも入れている男がいた。

私はそれを引っ張り出す。

『そして時は再び刻む』

私のその言葉と共に、私以外の時間が動き出し、ハイエナヤミーは  
セルメダルを撒き散らし後退りする。

『グッ…ヌウウウ……』

ハイエナヤミーは悔しそうに唸ると、その場から走り去った。  
さて、私はこいつ…ヤミーの親をどうにかしないと。

時は少し遡って咲也とハイエナヤミーが戦っている最中。  
とある廃家。

「うつ・・・んう、ここは・・・？」

視界に映るのは濃い茶色の木目天井。

・・・間

「・・・え、ここどこ？」

率直な感想である。

そんな率直な感想を漏らしたのは少年、音霧霊夢である。  
寝惚けた頭を振るい、目を強制的に覚まさせる。  
周囲を見渡し、状況を把握しようとする。

（見た目は・・・少し古い家かな。畳や卓袱台は少し古いけど補強してあるし、まるで『人が最低限住める程度になっている』ような  
）

「あら、気が付いたかしら」

霊夢が考察を続けていると、後ろの方から聞き覚えのある声がした。  
後ろに振り向くと、濃紺の半袖のシャツに膝ぐらいの長さの青いスカートをというラフな格好の・・・

「め、メズール!？」

「はあい 元気がしら？オースの坊や」

「ガメルも、いる!」

人間状態のメズール・・・「海風愛流<sup>みなぎあいる</sup>」と、灰色の半袖シャツにクリーム色のハーフパンツの人間状態のガメル・・・「犀牙<sup>さいが</sup>メル」がいた。

「何故ここに・・・っていうかここ何処ですか!？」

「言ってみれば私達グリードの拠点・・・いや、家かしら？」

「ガメルが見つけた!」

「そ、そうなんですか・・・えらいですね」

「えへへ・・・ガメルえらい!」

驚愕の場面から急なアットホーム場面(?)に変わった瞬間である。  
霊夢が何故ここに自分がいるのか尋ねると、セルメダルの気配を感じてやってきたら半分に割れた大量のセルメダルの山と、そこに倒

れ伏す霊夢がいて、それで救助し、今に至る・・・らしい。

「でも、ウヴァの偽者があそこまで屑ヤミーを出すなんて・・・何か企んでるのかしら」

「ですよね・・・今の所一番絡んでくるのは彼ですし、恐らく本来のウヴァさんのカマキリコア、バツタコア、彼のクワガタコア・・・ウヴァさんのコンボは結構強力ですし、最悪一枚奪ってコンボを使わせないという企みもあるのでしょうかね」

ウヴァのコンボ・・・『ガタキリバコンボ』は《平均＋×49》という方式で成り立っており、原典の『瞬時加速』が趣旨の『ラトラーター』、『重力操作』の『サゴーズ』、『液状化』の『シャウタ』、『飛行・炎操作』の『タジャドル』、『氷結能力』の『プティラ』に比べると見劣りするスペックではあるが『固体増幅』は大きなメリットが働く大きな要因ともなる。

分身ではなく、固体増幅。

それは、本体とは寸分違わずのスペックを持つ同固体が49体・・・『数の暴力』とは正にこのことである。

ガメルが悩む二人を横目に麦茶をこくこくと飲む中、あることが起こった。

チリン…チャリイン…

「「！！！」」



「っ！ ヤミーですか？」

悩み顔のメズールと、ほわほわとした表情のガメル・・・二人の表情が一変して険しい顔付きになる。

いつもならば霊夢もセルを感知するように能力を使っているが、今は完全に切っているためグリード二人の感覚に頼るしかないのだ。

「このかんじ、カザリのだ！」

「無論、偽者のね」

「だったら急がないと...ッ！」

立ち上がろうとする霊夢だが頭に痛みが走り、行動そのものが中断される。

「素人目だけど、最低でも半日は能力は使わない方がいいわ。これ以上負荷をかけると、脳がパンクするわよ」

「でも・・・」

「でももストも無いわ。幸い、ヤミーは弱ってるようだし放っておいても良いと思うわ」

「れいむ、よくねて、ゆっくりする！ むちゃ、ダメ！」

二人の言い分に言い返せず、霊夢自身も良い機会だと思い、二人の厚意の甘えることにした。

「むう、分かりました。ここでゆっくりさせてもらいます」

「素直で結構。さ、私達は家事に戻りましょうか。ガメル、手伝ってくれる？」

「うん、ガメル、メズール手伝う！」

「ふふ...ありがとう」

二人はそう言って霊夢の眠る居間から出て行った。

「・・・さて、早速ですけど退屈ですね・・・」

何かと濃い日常が続いた霊夢は、何も無くなると逆に暇すぎて暇になるのだった・・・

一方、場面を移す。

ビルの建設現場・・・そこはまだ骨組みのみで組まれており、工事用のカバーが掛かっているだけのお粗末状態である。  
そこには七つの人影があった。

まず一つ。

自称世話好きの猫姉さんことカザリ（怪人態）

そして三つ。

人型ではあるが、明らかに人ではないアナザーグリードの三人  
Aカザリ、Aメズール、Aガメル。

さらに三つ。

ちよこちよこ出番が出ている謎の三人組である。

しかし、状況はおかしかった。

カザリとA Gらは口を開けて（A G達に口が有るかは不明だが）  
然としており、上のほうの鉄骨の上に謎の三人組の内、左の白い髪  
にサングラスの男は嫌々、と言った感じに某昭和バイク乗り一号の  
ポーズをし、真ん中の朱色の髪のフリルの付いた服装の少女はドヤ  
顔で某電気カブトムシのバイク乗りの名乗りポーズをし、右の黒長  
髪でトレンチコートの高校生ぐらいの少女は羞恥からか顔を真っ赤  
にして某オンドウル王子の変身ポーズをしていた。

何故こうなったのだろうか？

時間はさかのぼること十分前のことだった・・・

「  
ー  
」

カザリ（人間態）が歌っているのは「キャプテンム サのケツアンカー（ソフト）」である。

周囲が苦笑いで彼女を見るが彼女はお構いなしである。「猫は常にフリードウム」、それが彼女の信条の一つだ。

しかし、そんな彼女とただ散歩しているわけではない。

いつもはウヴァと共に「猫の集会所」や「虫の集落」で学園都市中の情報を集めているのだ。

下手の情報集めや、情報端末頼りかは信憑性は高く、確かな物は多い。

・・・しかしその相方は現在別所にて絶賛片想い中である。

「やほー！諸君！元気にやっとなるかー！」

【姐さんじゃないですか！ハヨースス！】

【【ハヨースス！】】

ここはこの小説で既にお馴染みの公園の奥にある猫達の憩いの場：

「猫の集会所」（ケット・パーク）である。

その中のリーダー格だろう黒猫がカザリに気付き、大声で挨拶する。  
・・・大声と言った物の、実際には「にゃー」、「にー」、「ふにゃー」と可愛い声を立てているが読者の方々が物語を理解できなくなる為、翻訳させてもらう。

「して、今日まで何かあったかい？」

【ええ。何でも、ここにいる半数以上の猫が「霊夢さんを探す謎の三人組」を見かけてるんですわ。一人は中肉中背、アルビノの匂いのする白髪サングラスの男。次に小柄スレンダーで朱色っぽい頭のフリフリ幼女。最後が黒髪長髪的高校生くらいのトレンチコートの少女。話によると、グラサンが簡易呼称が「ベイ」、幼女の簡易呼

称が「マレウス」、少女の簡易呼称が「レオンハルト」・・・海外生まれの「ヘビスケ」の推測だとそれぞれコードネームの簡易呼称だと・・・】

これが猫の情報収集能力である。

猫の気配というのは意外と薄く、その身体能力などあらゆる情報集めるのが得意なのだ。

故に、ここへそれぞれの情報を持ち込み、交換しあっているのである。

一種の情報コミュニティとなっているのだ。

ちなみに「猫の集会所」の絶対的な掟として『情報とは五感である。視て、聴いて、嗅いで、舐めて、触る。それこそが何物にも勝る情報である』とある。

まるで何処ぞの刑事課のような猫達である。

「んで？偽者たちの方は？」

【うい。偽猫は気配を消しながら　　と言っても我らほども隠せていませんでしたが・・・　　学園都市を徘徊。偽虫の方は当ても無くふらふらと。偽魚と偽象は人気の無いところを回りながら徘徊してまずぜ】

偽猫・・・彼ら「猫の集会所」はアナザーグリッドを名前で呼ぶことを悉く嫌い、「偽　　」と別称コードで呼ぶ。

理由はただ一つ。

「優しい人たちの改悪版など、名前を呼ぶに値しません！」  
とのこと。

「そかそか　ありがとね。今度モン　チを大量に持ってくるよ」  
【【【ゴチになりまーっす!!】】】

今日も今日とて「猫の集会所」は平和なようだ。

それから数分後にA G達と出くわし、そのときに・・・

グラサン「・・・わざのかずいくる・べい（棒読み）」

黒長髪「ち、力のレオンハルト・アウグスト! / / /」

朱いロリ「そして私が技と力のマレウス・マレフィカルム!!（どやあ」

・・・と言っわけである。

それからしばらくのこと、沈黙が空間を支配したそうな。

「うーむむむう・・・」

一つの卓袱台を前に座り、顎を支えて悩みこむ少年・・・ご存知我等が主人公霊夢である。

卓袱台の上には今あるコアメダル全て。

タカ 2

クワガタ 1

カマキリ 1

バッタ 1

トラ 2

チーター 1

サイ 1

ゴリラ 1

ゾウ 1

ウナギ 1

ナチュラルコア

スパーク 1 (他2 2 アンク、美琴)

サンダー 1 (他2 2 アンク、美琴)

ライトニング 1 (他2 2 アンク、美琴)

## セルメダルⅡ 50

霊夢は考察を始める。

コアメダルとはそもそも何なのか。

『地球の本棚』

ほしのほんだな

によれば、800年前の王…つまり、先代のオーズが五人の優秀な魔術師に造らせたマジックアイテム。

一部は掠れていたが、残った部分を見る限りはグリードに関する項目だろう。

何かしらの拍子にコアメダルの一枚に命が宿り、それぞれ五種の十枚の内一枚を抜くことで、欲望の怪物、グリードを生み出した。

しかしその一方で、グリードの製造方法を知った他国が生み出したグリードこそがアナザーグリード。

王はグリード達とともに他国を倒し、アナザーグリードを封印するが、大臣の一人がその他国の潜入していた刺客で、オースドライダーを奪い暴走。

グリードは封印され、王は殺された。

オーズとなった大臣はオースドライダーを死んだ王の手に置き、その後には大臣はコアメダルの力に耐え切れず死亡。

それを知らない城の住人の一人が『王が暴走した』と勘違いを起こ



し、今の文献に至る。…らしい。

そして、五人の優秀な魔術師達は、オーズが暴走した時の保険として『何か』を造り出していたらしいのだが、いかんせん…その部分が掠れて読めなかった。

「（六種類目のコアメダル…でしょうか？目には目を…と言いますし。それか何かの武器かも知れませんか。『対コアメダル用破壊武器』とか…）」

それ以降の項目は千切られた様に失くなっており、確認することができなかった。

しかし、コアメダルの誕生した一片を確認することができたのでそれなりに満足した。

そんな時だった。

???キイイイイン…

「!?!」

目の前に並ぶコアメダルが、全て呼応する様に動く。

そう。

それはまるで、『何か』に怯える様に…

???????

学園都市の地下：虚数学区。

そしてそのさらに地下…

そこには大きな空洞：いや、最早「神殿」と言って良いほどの大きな空間が広がっていた。

その神殿のさらに奥。

そこには大きな一枚の壁画が存在した。

壁画には・・・

散らばり碎かれる色とりどりの金貨

その周囲に倒れる赤、緑、黄、白、青の異形

その中心に立つ紫の刺々しい鎧を身に纏い、九枚の紫の金貨を侍らせる人影

その光景は、余りにも異様だった。

その壁画を前に、二人の男女が並び立っていた。

「もうすぐなのか？」

男の方が話す。

「もうすぐ、と言えばもうすぐ。でも時期ではないわね。せめて『吸血鬼殺し』（ディーブブラッド）編が終わらないと」

男の方によく似た女が話す。

その話様は「致し方なし」と言わんばかりであった。

「うえへえ…『妹』（シスターズ）編ってどん位だったけ？一方通行も早々に出さないと…ってかどうやって出そうかね？」  
アクセラレ

「それも良いけど、バースはどうするのよ。よく考えないと…」

「わあーってらい！」

…しっかしなあ、旗男にするとセルの力…ってかセル自体消しかないし、一方通行だと他と被る」

「そうなのよねえ…」

「「はあー…」」

「とは言いつつも…」

「ええ…」

「「全ては戯言に過ぎない」」

この一言を言った男女の表情は、『三日月の様な笑顔』を浮かべていた…

次回へ続く……

仮面ライダー×仮面ライダー コラボ大戦EX『再開のD／二色と三色と騎士と

お待たせいたしました〜！

第四回です。今回は主に探偵事務所サイドかと。

グリードの出番は無しです。

仮面ライダー×仮面ライダー

コラボ大戦EX『再開のD／二色と三色と騎士と

??? Part.2の探偵事務所の場面とPart.3の咲也vs  
ハイエナヤミー戦の間Side.

まったく…今考えたら早朝に起きてないだろう。あの連中は……いや、案外新聞配達で起きてるか？

「どちらにせよ、連絡は後か」

溜息一つ。

残りのコーヒーを飲み干す…

「にがひ…」

ブラックで一気飲みは危険だな…うう、苦い……

「……頭痛い…」

私がコーヒーの苦さに苦しんでいると、マープルが起きて来る。  
まだ寝ぼけているのか、覚束ない足取りと寝ぼけ眼で歩いてくる。

「…ん。起きたかい？」

「ふえ？……さくやさん、おはようございます……」

「ん。おはよう」

寝ぼけ眼をこすりながらそう答えるマープルに、私は思わず笑みを  
零す。

可愛いなあもう…！

「とりあえず、何か飲むかい？」

「…牛乳下さい。目覚めの一杯…」

「分かったよ。その間に顔洗って来たらどうだい？」

「はあい…」

トトテとマールは洗面台に歩いて行くのを見届けた私はコーヒーのお代わりを入れるついでに牛乳を入れに台所へ向かう。

そして数分後。だいぶさっぱりした様な顔で歩いてきたマールに牛乳の入ったコップを渡す。

「んく、んく、んく……はあ」

マールはそのコップの牛乳を、腰に手を当てて一気に飲み干し……一息つく。

「…あれ、いーちゃんどこですか？」

「ああ、一なら情報探しに行ったが？」

それを聞くと、マールは少し安心したようにため息をつく。  
一体…？

「…別に、学園都市にいる女のところってわけじゃないんですね」

「…過保護だねえ」

そう言うマールの綺麗な瞳は妖しく光った…様な気がする。  
思わず一歩後退ったのはしょうがないと思うぞ。私自身。

「……あ。そういえば、咲也さんってこの町のライダーについて知

ってるんですよ?」

「ん? ああ。知り合いなのでね」

??? ここで私は普通に答えたことを後悔していたりする。

「...その人って、【ヒノエイジ】って名前なんですか?」

まさかマールからその名前が出るとは思わなかったな。

思わず動揺してしまったが... バレていないだろうか?

そう思い私は平静を装って聞き返す。

「いや、違うが... どうしてだい?」

「ん...なんて言ったらいいでしょうか。実は、この前この町のライダー... オーズに別の世界であつたんですけど、その世界で、なんでも不思議な人に【仮面ライダー】についての情報をいただいたんですよ」

『なぜか、Wについてはあんまり調べられなかったんですけどね』  
と、付け加えて言うマールに、私は戦慄を憶えた。

「...ちなみに、その不思議な人の名前は?」

この時の私は平静でいられただろうか?

恐らく形容し難い表情かおになっていただろうな...

「えっと、いーちゃんだけ聞いてたので、私はいーちゃんから聞いたんですけど、【五代雄介】って人です」



「…そうかい」

私は壁にもたれかかる様にして、頭を押さえる。  
幸か不幸か…マープルに『仮面ライダー〇〇〇』、その原典の情報があると思わなかった。

それも、その情報を与えたのがオリジナルの【クウガ】…五代雄介だと…？

例え霊夢が聞いたとしても、流石に驚くだろうさ。オリジナルが関わっているともなれば…な。

「……あの、大丈夫ですか？」

「ん、ああ…。なんでもないよ」

心配そうにこちらを見るマープルに、私は笑顔で返す。  
そこまでひどい顔だったのだろうな…

「…？ あ、それでなんですけど…セルメダルって今、持ってます？」

「セルかい？ 一応、数枚ならあるが…どうするんだい？」

私はそう言いながら、机の引き出しからサソリ、カマキリ、コンドルのセルを取り出し、マープルに投げ渡す。

それを受け取るとマープルは妖しくニヤリと笑い、ポケットから『明らかに』物理的におかしい量のドライバー等の機材を取り出す。

マーブルの周囲はそのまま機材でいっぱいになる。（邪魔にならない分良いか…）

「ではでは！さっそく研究＆解剖をですね！！」

マーブルはさらに、胸の谷間から一つのノートパソコンを取り出し、それにいくつかの画面が付いたUSBを差し込む。

…胸……（ギリッ……！

「…え？」

私がいろいろとあっけに取られていると、マーブルはさらにそのパソコンにケーブルを繋ぎ、ケーブルを更に機材につなぐ。それはもうガシャコンガシャコンと。

「まず、材質から調べましょうか。削り取れば一番いいんですけど…」

そういうと、マーブルはスワローペンシル（確かそう言う名前のガジェット）を取り出し、メモリを挿入する。

MAGICIAN！Maximum Drive！！

「はいつと」

マーブルは、いきなり何本ものドリル付き触手の生えたスワローペンシルでセルメダルを削り始める。

「ふんふんふん」

マープルは、実に楽しそうに笑いながらガリガリと削る。

…Dr・真木とは違う方向のマッドかこの娘……

「…ま、まあ楽しそうだからいいがね…」

私もジャリバー製作当初はあんな感じだったのだろうか…そう思うと気が遠くなってきた…（汗）

「あ、そういえばセルって割ったら屑ヤミーが出るんですけどっけ？」

「ん？ ああ。確かそうだが…割る気かい？」（副音声：マジヤメ口）

私がそう言つと、マープルは可愛らしい笑顔で首を縦に振る。

「もちろんですよ ま、ドリルで傷つかないから無理そうですね…」

マープルは残念そうに言つと、数分間ドリルに削られながらも全く傷ついていないセルを見せ、ため息をつく。良かった…ここを出されたら霊夢と麻理沙に何を言われるかわからない…！

「…ここに屑ヤミーが出ても困るからいいがね…」

「屑ヤミー…せめて、腕一本くらいでもいいから研究したかったんですけどね…」

マープルはそう怖い事を言いながら、PCについたスキャナーの様な機械にサソリとコンドルのセルを乗せると、またカタカタとキーボードを叩く。

「…で、次は何をしてるんだい？」

「セル自体にはコアメダルの様な細かい違いがあるのかどうか調べようと思ひまして？」

マープルはカタカタと打ち続けながら、余ったカマキリを私に投げ渡す。

「おっと…なんだい？」

「私の代わりに、カンドロイドってのを買ってきてもらえませんか？」

マープルは咲也と目も合わさず、キーボードを打ちつづけながら言う。

「……………ああ、分かったよ」

私は、なぜか何を言っても無駄な様な気がして、何も言わずに事務所を出ていくのだった。

????ーがドーパントと戦っている頃…グリードの空き家Side・

「ふ、ふふふ…完!」

バツ \ (。A。 ) > バツ

ベルトを締め???

「全!」

バツ く ( 。 A 。 ) / バツ

??? 白いパーカーを羽織り???

「ふっ!」

サ / ( > < ) \ サッ

??? 再調整したオーバルアーツとオーズドライバーをベルトのホルダーに入れ???

「かーっ!」

テー \ ( > < ) / ノー

??? 宇宙キターと言わんばかりのポーズで安静状態から回復した喜びを表す霊夢少年であった。

「…って今回の僕の出番ここだけですか!」

ネタが無いのよ…

「ウソダンドコードーン!」

??? それから一時間後 (VS ハイエナヤミー戦後) 音霧探偵事

務所

「ただいま…っと」

「あ、おかえりなさ……………誰ですか、それ」

事務所扉を開けると、休憩中なのか作業を止めたマーブルが振り返り、私が肩を貸している一人の男を見て、首をかしげる。

言わずもがな。ハイエナヤミーの親だ。

「…ちよつと、ヤミーの親になつてた人間だ。放置できないし、連れてきたんだよ」

「…採血とかは「するなよ?」…ちえ」

一応、精神エネルギーだから採血はするだけ無駄だからな。  
私はマーブルの言葉を遮り、ヤミーの親を適当にソファに倒す。

「…でも、その人。どうするんですか?」

「気を失つてただけ見たいだし、意識が戻るまでの間寝かせておこう。…で、何をしてたんだい?」

マーブルの質問に答えると、私はマーブルの前の机の上のゴチャゴチャとした機械の部品を見て言う。

片付けは自分でしてくれよ?

「あ、見よう見まねでカンドロイド作ってみたんですよ。セルメダルの特徴を調べて、カチャカチャっと」

そう言うと、マープルは机の上の機械を手際よく組み合わせ、その三つのカンドロイドを見せる。

「一人で作ったのかい？ この短時間に…三つも」

「はい メモリガジェットの応用で意外と簡単にできましたよ？」

新手的なバグかこの娘…（汗）

マープルはそう言いながら仕上げとばかりにカンドロイドの外装をカチャカチャと装着する。

「とりあえずサソリ、コンドル、カマキリの三種だけですが、どうぞ」

私はそれを受け取り、見た目を確認する。周りはどう見てもカンドロイドと同じであり、本当に細かいところしか差異はない。

うん。やっぱりこの娘バグだ。チートだ。劇場版補正だ。

「…で。私にこれを買に行かせた意味はなんだい？」

「あ、待ってましたよ」

私は溜息一つ、自身が買ってきたタカ・タコ・バッタのカンドロイドを投げ渡す。

マープルはそれを嬉しそうに受け取り、タコカンの蓋を開ける。

「この手紙、そっちの一番偉い人に渡して下さい」

マールは缶モードからタコモードにするとタコカンに懷から出した一つの封筒を渡し、飛ばす。

「…今のは？」

「折角ですから、お偉い人とお話がしてみたくて。〇〇〇についてもいろいろ知ってるみたいですし」

「…探求熱心だね、本当に。他のカンドロイドは？」

「分解、解析用です」

そう言うと、一瞬カンドロイドが震えた様な気がしたが…タカカン、バッタカンのご冥福を祈りつつ質問に移る。

「…ちなみに、この三つの性能は？」

そう私が聞くと、マールは三つのカンドロイドの蓋を開け、起動させる。

「サソリは地面に尻尾を突き刺して液状化現象起こせたり、毒針発射出来たりします。」

『機能詰め込み過ぎて追尾能力とかないですけどね』とマールは付け加え、サソリカンドロイドを撫でる。

sonだけできれば充分だよ。メダル研究に携わったものからすれば、ね。

撫でられたサソリカンは喜ぶ様にハサミを上下させる。



「…で、コンドルはスピードは兎も角、攻撃力に重点を置きました。翼とか爪とか結構鋭いですし」

コンドルはマーブルの肩にそっと止まり、すり寄る。  
…ほう。

「意外と懐いてるね」

まるで鷹を扱う獵師の様だ。

「まあ、造物主ですし」

マーブルはそう言い、最後のカマキリカンドロイドに手を伸ばす。

「これは、一応単体でも攻撃力ありますけど…本質は、メダジャリバーとの合体ですね！」

「…合体？」

私がそう聞き返すと、マーブルはメダジャリバー（予備）を手に取り、さらにカマキリカンを変形させる。

「……に………」

マーブルはメダジャリバーのセル装填部分に被せるように変形させたカマキリカンを着着し、満足げな声を出す。

「ふう…どうです!？」

「…どう、って」

私からしたら、ただくつつけたただけだな。大きな変化も無く、せいぜい刃の部分が緑色になっているだけだ。私ならもっと大きな（大袈裟な）変形機構を…げふんげふん。

「む…じゃ、見てて下さい？」

マーブルはそう言うと、メダジャリバーを軽々と持ち…軽く振る。

？すると、刃から何かが飛び…数メートル先にある台所のキャベツを真っ二つにする。

あれは昼食用の…

「……………斬撃を飛ばせるようになるのかい」

「ええ　しかも、セルをいければ三連オースバツシユ使えますよ」

上手くいけば相手を空間に閉じ込めたり

そうマーブルはなんか怖い事を言い、笑顔になる。  
もうやだこの娘こわい。

「…そうかい」

溜息一つ。最近の私は溜息が増えた気がする。

…と、その時。

「……………あ、はい」

「ん？」

マーブルが楽しそうに声を出す。

そちらを見ると…マーブルは、腰にベルトをつけ、手にはメモリを持っていた。

【ASH!】

「私の体、お願いしますねー？」

「え、ちょ、おま」

「変身！」

私の答えも聞かず、マーブルはメモリをベルトに挿入し…そして、メモリが消えるとともにマーブルは目を閉じ、ソファにゆっくりと倒れ伏す。

「…なにかあったのか…全く、忙しいね」

私はそう言っただけ溜息一つ、自身も目を閉じ、休憩し始める。

今度、一に何か奢らせよう。私はそう密かに決心するのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4455w/>

---

仮面ライダー×仮面ライダー コラボ大戦EX『再開のD / 二色と三色と騎士と』

2011年11月21日17時23分発行